
ロンドン留学体験記

綿村 直人 University College London

私はイギリスのロンドンにあるUniversity College LondonのDementia Research Institute (DRI: 認知症研究所) で2022年9月よりResearch Fellowとして留学しており、2024年9月から1年間、細胞科学研究財団より育成助成をいただき、研究留学を継続することとなりました。

DRIでは、認知症研究を牽引する世界トップレベルの研究者が集い、日々認知症克服のため、議論が交わされています。私は、認知症の中でもタウタンパク質に興味を持ち、UCL-DRIのDirectorであるKaren Duffチームで研究を行っています。Karenのチームは、8人のSenior/Postdoctoral Researcherと4人のPhD Student、3人のTechnical staff、計15人で構成されており、一人一人が異なるテーマを持ち、研究に取り組んでいます。時には研究室を超え、他のDRI内のチームと共にプロジェクトを進めることもあり、人的ネットワークの形成に役立っています。私が取り組んでいるプロジェクトは、新規タウオパチーモデルマウスの作製および解析です。本プロジェクトは、留学前に所属していた理研CBS西道ラボにいた頃からDuffチームと共同研究として進めており、昨年論文発表に至りました。現在は、UCL-DRIが保有するプラットフォーム利用し、作製したモデルマウスをもとに時空間的一細胞解析を行い、タウオパチーの発症機構解明を目指し、日々研究を進めています。

思い返せば、留学先を探していた頃はCOVID-19の影響で、海外渡航が制限されていたこともあり、留学先とは基本的にメールのやり取りやビデオ会議等でプロジェクトの打ち合わせを行っていたことを懐かしく思います。幸い、留学開始前は生活の制限が徐々に緩和されたため、研究活動はスムーズにスタートすることができたと思います。ロンドンは家賃や物価が高く、アパートを探すのも一苦勞でした。留学して最初の3ヶ月は、住む家が見つからず、Airbnbを利用し、ゲストハウス暮らしでした。やっと見つけたアパートの家賃が当時の収入の50-60%を占めることとなり、生活に四苦八苦していたことを今でも鮮明に覚えています。なので、生活面は助成金に本当に助けていただきました。

留学をするかしないかで悩んでいる方がいましたら、ぜひ留学することをおすすめしたいです。正直、研究の情報量は日本にいた頃とそこまで変わりません。ただ、最先端の情報にいち早く触れる機会が多いように思います（留学先に依存しますが・・・）。また、精神的に大きく成長できることは間違いありませんが、日本では得られなかった多様な価値観に触れることは、

今後の人生をより多彩にしてくれると信じています。特にロンドンは、ヨーロッパを中心に、色々な国から来た大学院生や研究員がいて、育った環境や生活が違っていても英語でコミュニケーションを図り、チームとして前進していきます。皆それぞれの生活や進路の悩みを共有することで、打ち解けます。このプロセスは留学ならではのもので、日本では体感することはできません。筆者は留学に対して考えすぎていたところもあり、実際に”行動すること”がいかに大切なのかを学びました。なぜなら、自分が思う以上に多くの経験をするからです。少しでも留学に興味があるようでしたら、ぜひ飛び込んでみてください。

最後になりますが、この度は留学の機会を支援くださいました細胞科学研究財団の関係者の皆様に深く感謝申し上げます。また、この留学を実現するまでに大変お世話になりました、理研CBSチームリーダーの西道隆臣先生、名古屋市立大学の齋藤貴志先生 にこの場をお借りして感謝申し上げます。



Cruciform Building-UCL外観



Karenラボ集合写真（中央：筆者）